

入学式および卒業式の式文研究

——キリスト教系各種学校の一視点から

聖公会神学院
山野 貴彦

0. はじめに

0.1. 経緯

日本における教育機関の歴史は長い。学校についてはたとえば下野国足利荘（現栃木県足利市）に建てられた足利学校は日本最古の学校とも言われ、16世紀後半には安土および有馬に設立されたキリスト教系の学校セミナリオも確認される。長い歴史を有する学校は、その時代時代の理念や状況、また、ことに創設者の教育理念を根幹に置いて創設される。

その教育理念はむろん学校教育全体において示されるものであるが、とりわけ入学や卒業の式典は、学内外の様々な人々（学生・生徒、保護者、来賓、教職員など）が集まる場であるがゆえに、それが象徴的に示される場となる。

2023年度はコロナウイルス禍に一定の区切りがつけられ、対面による教育活動が再開された一年であった。オンライン授業など新しい形態の経験もふまえ、多様な学校教育が再開されてきている中、建学の精神を伝える機会となる入学・卒業の式典およびその式次第を研究することは学校教育の根幹を支える理念の確認として意味があると考えられ、本研究課題が設定された次第である。

0.2. 目的と方法

本研究は、建学の精神が投影される式次第を明確にすることを目指す。本学は聖公会（アングリカン・コミュニオン）に属するキリスト教系各種学校であるため、聖公会神学とくにその精神を示す書物の一つである祈祷書を基礎に据え、入学礼拝および卒業礼拝の式文に反映させることを試みる。ただし、式文を作成するだけでなくその理念を示す註釈を作成することにより（本報告書がその一定の役割を果たす）、本研究がミッションスクールのみに通じる試みではなく、各地域の様々な学校の、その建学の精神の再確認や対話を促進するものになることを目指す。

手法としては、筆者の用いることができる言語（日本語、英語、独語）で記された礼拝、入学および卒業に関する資料——ことに式文——を収集し、それを基に、各々の式文を形成する理念や建学の精神について精査する。

以上の作業を経て得られた知見を活かしつつ、本学における入学礼拝および卒業礼拝の方向性を明確にし、それに即した式文および本報告書を作成する。

1. 各教育機関における入学式（礼拝）・卒業式（礼拝）の式次第の事例

本研究のために、事前に今回はおもに聖公会関係の学校を軸にして合計 26 校に式文の提供を依頼し、本研究期間中に依頼数の半分の学校から返答をいただいた¹。また、書籍として、あるいはオンライン資料として入手できる海外の文献にもアクセスした。

1.1. 建学の精神

各教育機関にはその教育機関の意味に即した建学の精神が明示されている。基本的には、「知性・意欲の向上」と「他者の尊重」が重要なテーマとして挙げられる。これは、宗教関係の学校でも概略だけに絞れば同様である。その中で、宗教関係学校²における独自性は、各教義が反映されたものになっているところにある。キリスト教関係学校はイエス・キリストの言行を、仏教関係学校は仏陀の言行が建学の精神の基礎を形成する。神道関係学校では聖典とされる文書群（神典）に即した神道精神が基礎となる³。これら宗教関係の教育機関の建学精神は、文言的には国公立系の教育機関と大差はない⁴。しかし、法の拘束力あるいは法の究極理念が宗教に置かれる⁵という一説と同様のことが建学の精神についても言えよう。宗教が重視するのはそれぞれの宗教が見る人間存在を超えたところにある本質であり、人間の恣意的な判断が前面に出た道徳倫理を説くことへの予防的な措置が採られる。礼拝を通して示される普遍的・究極的な存在に向けての導入教育は、宗教関係学校に特有のものと言える。

聖公会関係学校の建学の精神を共観すると⁶、おもに二つのキーワードが浮上する。西原が指摘するように⁷、「真理を探究することができる」「一人ひとりの存在を大切にすることができる」というものである：前者については①普遍的なる真理を自由に、かつ謙虚に探究することができる、②神から与えられた才能、資質を伸ばし、科学的知識を培い、技能を磨くことができる、③伸びやかな発想で自分を表現し、知性を広げ、望みを高くすることができる、④自分の殻を破り、これまでに身につけ、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って、自分を解放することができる、後者については①神を畏れつつ、世界、

¹ 学生・生徒の個人情報漏洩のリスクを基に提供ができない、という返答もあった。それはもっともなことであるが、他方で、そのような本研究が求めている情報については編集・考慮・削除等々の対応をした上で提供して下さった学校もあった。

² 齋藤崇徳「日本における宗教系大学の比較分析——制度的変数を中心として——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 53 号、2013 年では、宗教系教育機関として「キリスト教系」「新宗教系」「神道系」「仏教系」の四つが分類として挙げられている（58 頁）。なお、これら宗教系教育機関の総数については、毎年 5 月 1 日に調査が実施され、その年末に文部科学省が発表している「学校基本調査」（URL：https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm）も参照。

³ その他に新宗教系関係学校でもそれぞれが重要とする人物や文書を基に建学の精神が示されている。

⁴ 日本においては、宗教教育自体は日本国憲法第 20 条第 3 項、また、教育基本法第 9 条（宗教教育）で禁止されている。国公立系の教育機関も厳密にはそれぞれの国の宗教的な慣習が反映されるものではあるが、たしかに日本において教義の授業等は国公立系の学校で行われることはない。

⁵ 尾高朝雄『法の窮極に在るもの』21-24 頁。

⁶ 西原廉太「聖公会の神学から考えるミッションと伝統の現代化」日本聖公会管区『第 62 回 聖公会関係学校教職員研修会報告書』、2019 年：6-8 頁。

⁷ 同上 9-10 頁および 20-21 頁参照。

社会、隣人、すべての「いのち」のために、愛をもって仕え、共に生きることができる、
 ②神の前では、一人ひとりの人間が等しい意味と価値を持ち、神から愛されるかけがえのない存在であり、尊重されなければならないことを、理解することができる。

神学校はそもそもその教派の指導者育成を基礎に置くため、建学の精神はその教派の神学を色濃く反映することになる。その意味では神学校の建学の精神やそれを反映する礼拝ことに入学・卒業礼拝は、一つの基準になることが目指されるものになる。

1.2. 式文の事例

日本においては神学校、大学、高等学校、中等学校、小学校、医療専門校の入学・卒業式文、海外においては神学校や教会の新しいメンバーの加入における歓迎式、修了における学位授与式、あるいは、信徒奉事者就任式における祝福式などの式文がここで検証される資料となった。

筆者の収集した式文からは、大学・高等学校・中等学校・小学校の入学礼拝や卒業礼拝では基本的に、ユーカリストにせず⁸、日々の礼拝の構造に入学と卒業にかかわる部分が加わる形式となっている。具体的には以下の要素がある：

入学礼拝 歓迎・受入	卒業礼拝 送別・相互祝福
記念品授与（校章など）	卒業証書・賞状・賞品・記念品授与
新入生のための祈り	卒業生を送る言葉・祈り
学校特祷	学校特祷
歓迎の言葉	在校生送辞
入学の言葉	卒業生祝辞
来賓・参列者紹介	来賓・参列者紹介

礼拝の基本である「み言葉」部（聖書朗読と説教 *式辞とする学校もある）に加え、入学礼拝においては「歓迎・受入」部が、卒業礼拝においては「送別・（送られる者と残る者との）相互祝福」部がそれぞれ設定されることが特徴である。み言葉の部では集められた者たち全員にとっての集まりの意義や聖書の言葉からの学びということが重視されることから、入学生・卒業生自身、また、保護者各位にとっての頂点はこの「歓迎・受入」「送別・相互祝福」部になると言えるであろう。構造上の軸となる部があるという点で、入学礼拝

⁸ これはユーカリストが「秘跡／聖奠／礼典／機密」に位置づけられ、洗礼を受けていない者が原則的に与ることがないものである以上、必然的な帰結となる。ただし、それは学校における諸礼拝が教会で行われるユーカリストより格下となることはまったく意味しない。学校礼拝の位置づけについては、市原信太郎「キリスト教主義学校における礼拝の意味『キリスト教主義の学校』を教会たらしめる営み」を参照。学校の礼拝は教会の礼拝から切り離されるものではなく、教会の広い意味での活動の枠組みの中に組み入れられるものである（さらに『キリスト教礼拝・礼拝学事典』「学校礼拝」の項目（49-51頁）も参照）。

や卒業礼拝が日常の礼拝（Daily Office）と異なることは明確である。ただし、収集した資料からは、通常の朝夕の礼拝の形式に「歓迎・受入」「送別・相互祝福」部が接続しているものも一定数見られた。それらの式文は、これから学生・生徒諸氏が行ってゆく礼拝を実際に学生・生徒各位、保護者各位に示すという意味を重視していると理解される。

神学校においては聖餐式に入学式・卒業式を組み込む形式とみ言葉の礼拝⁹に組み込む形式とが見られる。前者の場合は、神学校に在籍する学生はもちろん、また、その保護者・関係者各位もキリスト教徒である可能性が高いことから、主の食卓をとともにすることの重要性が意識されたものである。後者の場合は、保護者・関係者各位が必ずしもキリスト教徒とは限らない中での礼拝であるということ意識したものと言える。全員が聖餐に与れるという場合には聖餐式の形式は共同体の一体性をより明確にすることができるであろう。また、「み言葉」部と「聖餐」部という、構造の軸を形成するあいだに挟まれることで、その重要性を意識させるものとなることが期待される。他方で、パンとぶどう酒に与れない者が一人でも生じるようであれば、み言葉の礼拝により、み言葉を通して学びと信仰をあらためて憶えた後、入学・卒業の式を通して集った者全員が神学生の歩みを意識し、奉獻・派遣の部に移るという展開となる。いずれも、入学礼拝・卒業礼拝の構造として適したものと言えるであろう。肝要となるのは、説教でその集いの意味と会衆へのメッセージが伝えられ、聖書のみ言葉に聴いた学びを通してあらためて洗礼の誓いなどを想起しつつ入学・卒業への気持ちを新たにすることと言えよう。

なお、聖歌については、聖公会関連学校においては多くの場合『聖歌集』、日本キリスト教団の神学校の場合には『讃美歌 21』から選択されている。特徴的であったのは、入学式の入堂もしくは退堂の際に歌われた聖歌・讃美歌が卒業式の入堂聖歌で歌われる事例が多いことである。式典の性格上、感謝やキリスト者の責任を主題とする聖歌が多く用いられるのは当然であるかもしれない。ただしまったく同じ歌であるということには意味があるだろう。入学礼拝の最初もしくは最後に実際に大きな声を出してともに歌った聖歌・讃美歌が卒業礼拝の入堂で再び歌われることは、入学時の心境や誓いを想起させやすいと考えられる。入学礼拝で学内に受け入れられ卒業礼拝で学外へと新たに遣わされてゆくという枠組みを鑑みれば、この二つの礼拝が別個のものではなく一対を成すものであることは明白である。各学校から提供いただいた式文から、あらためてその視点の重要性を認識させられることとなった。

この認識を基に、実際の式文作成に当たっての必要事項や内容について次項で言及することとする。

⁹ 定義や形式についての理解が教派によって異なるが、基本的に聖書朗読、説教、祈禱で構成される礼拝を指す。

2. 入学式（礼拝）・卒業式（礼拝）の式文作成のプロセス：聖公会神学院の場合

2.1. 前提

2.1.1. 建学の精神

聖公会神学院の建学の精神については、募集要項や履修要項の「教育概要」の項に提示されている。主題として挙げられるのは「神の民の共同体に仕える奉仕職・聖職の育成」である。以下にこの主題に続く説明文を引用する：

聖公会神学院は、世界における神の宣教に遣わされた神の民の共同体（教会）に仕え、キリストから委託された職務を担う聖職者・奉仕者を育成することを使命とする。神はすでにこの世界において創造、解放、贖いと和解の働きによってその救いのみ業を行なわれ、そのみ業に参加するように私たちに招いておられる。神の民としての共同体は主イエス・キリストのみ名によって、奉仕の業を通して神の救いの恵みと真理を証し、この世に対する神の目的に向けて派遣されている。この奉仕職は、福音の受肉化に生きる僕としてのリーダーシップ（*Servant Leadership*）の務めを果たすことを通して、神のみ国の実現に向かって教会と世界が絶えず変革されるための働きである。特にこの世界において痛んでいる人々、苦しんでいる人々と共に立ち、闘っておられる主イエスの招きに日々耳を傾け、この世界と教会の生命を新たにされる神に信頼して、神の民と共に課題に取り組むことが大切にされなければならない。またこの奉仕者は、聖霊の導きを祈りながら、共同体に仕える指導者として自らの破れと弱さを謙虚に省察し、絶えず直面する状況に対して柔軟にまた批判性に基づく創造的なあり方が求められている。

聖公会の諸教会に仕える聖職者・奉仕者は、聖書の使信を正しく理解し聖公会の伝統を創造的に継承するとともに、現代世界のただ中に生きる教会に仕えるものとして、変転する世界に対して的確な智慧と識別力をもつ指導者また対話者でなければならない。そのために、聖公会神学院は、信仰の共同体における反省的な智慧に支えられた学科と研究を中心とする知的教育と、礼拝・生活・黙想・人格的交わりをとおして得られる豊かな人格性の涵養を目標とし、知的・霊的にバランスのとれた奉仕職の育成に努めなければならない。

これに、教育的ヴィジョンと留意点が続き、1) 日本とアジア（特に東アジア）の歴史、社会、文化の状況における神の宣教の捉え直し、2) 世界（特に日本）における多様な宗教・文化・伝統に対する理解の拡大、社会と教会のもつ課題への関心と関わりへの深化、3) 聖職、信徒奉仕、継続教育¹⁰の三本柱による神学教育、4) 神学の四分野区分——「聖書」「歴史」「教理」「実践」——とその有機的結合が挙げられる。

ここで、これまで言及していなかった、しかし、本質的に重要な聖公会神学についても

¹⁰ すでに聖職に就いている人たちのために期間・内容を宣教の現場のニーズから自由に設定するものと定義される。

言及しておきたい。もっとも、聖公会神学を定義するのは、多様性を重んじる伝統があるゆえに、そもそもきわめて困難である。様々な主題に対し、両極端な見解が共存することも多々ある。それでも、神学的な理念として以下の鍵語が軸となるということにはまず異が唱えられることはないであろう：

a) ヴィア・メディア (Via Media)

聖公会神学の特徴を端的に示すものとして挙げられるのがこの概念である。リチャード・フッカーによって提唱され、オックスフォード運動の指導者の一人ジョン・ヘンリー・ニューマンによって強調されたもので、「聖書」「伝統」「理性」を軸に、人間的な絶対主義を採らず、真理を求める道の真ん中を歩むことを目指している。

b) ミッシオ・デイ (Missio Dei)

1952年のウィリンゲン会議によって重要な主題として取り上げられることとなったものであり、カール・ハルテンシュタイン、リチャード・ニーバー、レスリー・ニュービギン、デーヴィッド・ボッシュらによって展開されてきた歴史を持つ。

従来の宣教観 *Missio Ecclesiae*、「神—教会—世界」という構図で概略されるある種の教会中心主義から脱却したもので、神の宣教 *Missio Dei* は、「神の宣教」こそが第一義であって教会はそれに参与しているものという理解である。宣教は恵みとしての神の三位一体¹¹の性質に生じるものであり、宣教の中心には神が在る。天地創造の神は遣わす存在である（天の神）と同時に、遣わされ受肉した存在（救い主み子イエス・キリスト）でもあり、教会はそれに組み入れられて聖霊のまじわりの中であって世界に仕えるはたらきに与る。神はまず世界にはたらかれるのであって、教会はその世界から課題を受け取るという構図になる。

c) 神の民

ミッシオ・デイにおける教会観は必然的に、教会に属する一人一人がかかわることとなる。それは、目立つような運動ばかりである必要はなく、個々に与えられた賜物が活かされることが重視される。大事なものは神への応答的姿勢であって、成果主義ではない。

祈祷書では聖餐式の感謝聖別における司祭の祈りの中で、神の民が教会の個々人全員を指すことが明示される文言が見られる：

父はみ子によって永遠の初めから万物を造り、みかたちに似せてわたしたちを造られました

¹¹ 詳細は、全聖公会神学教理委員会編『ヴァージニア・レポート』（興石勇訳）聖公会出版 1997年参照。オリジナルは *The Secretary General of the Anglican Consultative Council, The Virginia Report*. London 1997.

た。父は、み子を人として生まれさせ、十字架の死と復活によって、わたしたちを罪の鎖から解放し、み子をご自身の右に挙げられました。そして聖霊を送り、わたしたちを神の民としてみ前に立たせ、主の祭司として主とすべての人びとに仕えさせていただきます。

その他にも、聖職が伝統における権威として教会を代表することはあってもそれが権力的なヒエラルキーを形成するわけではなく、全員が同等で一体的である神の民として祈りを献げているということが数々の応唱の中で確認される。

以上の神学的立場についてはさらに、アングリカン・コミュニオンでは **Five Marks of Mission** (宣教の五指標)¹²が存在し、日本聖公会では日本聖公会綱憲¹³、教会の五要素¹⁴を参照することができる。聖公会神学院の教育目標で示されている精神もこれらの伝統をふまえたものとなっており、これを日々の礼拝またとりわけ入学礼拝・卒業礼拝で具現化してゆくことが理想とされる。

2.1.2. 祈祷書における式文から入学礼拝・卒業礼拝式文へ

聖公会祈祷書には様々な場合における礼拝の基本的な式文が記載されている：朝夕の礼拝、朝昼夕就寝前の祈り、嘆願、聖餐式（聖餐準備の式、聖餐式）、洗礼志願式、洗礼堅信式、条件洗礼式語、緊急洗礼、堅信式、共同懺悔、懺悔の式（共同懺悔・故人懺悔）、聖婚式、誕生感謝の祈り、病人訪問の式、葬送の式（葬送式、幼年葬送式、通夜の祈り、逝去者記念の式）、聖職按手式（主教按手、司祭按手、執事按手）、牧師任命式、伝道師認可式、礼拝堂聖別式。

そのそれぞれは、聖書および聖公会の神学の伝統に根ざした式次第を有する。たとえば、

¹² Lambeth Conference 1998 (ランベス会議 1998年)における提案を基に発出された、全世界の聖公会で宣教の目標として設定されているもの：1) 神の国のよき知らせを宣言すること—2) 新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと—3) 愛の奉仕によって人々の必要に応答すること—4) 社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること—5) 被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること。

¹³ 米国聖公会のシカゴ総会（1886年）において「教会一致のための最低条件」として可決され、その二年後の第三回ランベス会議（1888年）で承認された「シカゴ—ランベス四綱領」(Chicago-Lambeth Quadrilateral)を元にしつつ、以下の四つを挙げる：1) 旧約及び新約の聖書を受け、之を神の啓示にして救いを得る要道を悉く載せたるものと信ずる。—2) ニケヤ信経及び使徒信経に示されたる信仰の道を公認する。—3) 主イエス・キリストの命じ給うた教理を説き、其の自ら立て給うた洗礼及び聖餐の二聖餐を行い、且つその訓戒を遵奉する。—4) 使徒時代より継紹したる主教（エписコポ）、司祭（プレスプテロ）、執事（デアコノ）の三職位を確守する。実際にはとりわけ第四項は、シカゴ—ランベス四綱領の英語原文とはかなり異なっており、翻訳の域を超えるものとなっている（原文は *The Historic Episcopate, locally adapted in the methods of its administration to the varying needs of the nations and peoples called of God into the unity of His Church.* すなわち「神の教会の一致へと神に召された諸国民や民衆のさまざまな必要に対し、その執行の方法が地域的に適用されるものとしての歴史的な主教制」となる）。

¹⁴ 日本聖公会宣教協議会 2012 において提案されたもの：1) み言葉に聴き、伝えること<ケリュグマ>—2) 世界、社会の必要に応え仕えること<デアコニア>—3) 生活の中で福音を具体的に証しすること<マルトゥリア>—4) 祈り、礼拝すること<レイトゥルギア>—5) 主にある交わり、共同体となること<コイノニア>。

聖公会神学において正奠として洗礼とともに定められている¹⁵聖餐式は「み言葉」「聖餐」の二部から構成されており、そのそれぞれがさらに細分化されて全体を構築する¹⁶。

これらは上記の正奠にかかわる礼拝においてその文言に反映される。入学礼拝・卒業礼拝においても、このことは同様である。入学の式典において新入生と教職員、また、来賓に、教育理念が明示的に共有されることで、その後の教育活動の成果もまた具体的になる将来が期待される。卒業の式典においては、教育理念が具体的に明示されることにより、卒業生は自身が属していた学校における学びの内容をあらためて想起し、卒業後の活動の基礎のひとつとして認識することが期待される。このように見ると、教育機関における学生に伝えるべき精神は、入学式と卒業式の式典を両極とする大きな枠組みの中にあることがあらためて確認される¹⁷。

上記のことをふまえ、聖公会神学院の入学礼拝・卒業礼拝の式文もまた、聖公会神学の流れの中で構築されることになる。

2.2. 入学礼拝の構造——主題：単なる知識習得ではなく、愛を基にした智慧の探求

入学礼拝は以下のような構造を有する：

序

- 1) 参集
- 2) 入学礼拝の宣言
- 3) 聖語
- 4) 特祷

み言葉

- 5) 第一朗読：旧約聖書
- 6) 詩篇
- 7) 第二朗読：使徒書
- 8) 聖歌
- 9) 福音書
- 10) 説教

受入

¹⁵ 日本聖公会『祈祷書』（1990年版＝現行祈祷書*2024年1月現在。以下では括弧に括ったこの部分は割愛する）教会問答の問答15参照。

¹⁶ 全体としては次のように進む：参入（一大栄光の歌）—特祷—[み言葉] 旧約聖書—使徒書—福音書—説教（一ニケヤ信経）—代祷—懺悔—[聖餐] 平和の挨拶—奉献—感謝聖別—陪餐および感謝と派遣。

なお、既に紀元2世紀の殉教者ユスティノスは『第一弁明』において、参入—朗読（福音書もしくは預言書）—説教—代祷—平和の挨拶—聖卓の備え—感謝聖別の祈り—陪餐—欠席者への陪餐手続き、の九部構成の聖餐式の流れを示している。日本聖公会『祈祷書』聖餐式の序説を参照。

¹⁷ これは上述（1.1. 建学の精神）でも示唆した通り、仏教などの他宗教の創設した教育機関でも同様であるうし、公立学校も様々な背景を有し、その地域とのかかわりを有するため、個々の学校に一定の教育方針があると言えよう。

- 11) 推薦一試問
- 12) 平和の挨拶
- 13) 代祷
- 結
- 14) 感謝
- 15) 紹介
- 16) 派遣

聖公会神学院においては、入学礼拝では聖餐式の形式を採らないため、「み言葉」と「聖餐」ではなく、「み言葉」と「受入」が構造の中心を形成することとなる。以下、各項目について説明を加えることとする。

2.2.1. 序

2.2.1.1. 参集

入学式という文脈を以て集う式典であることを意識しつつ、聖歌第 279 番あるいは CP 453 番¹⁸を用いる。前者は、入信の式に用いられる聖歌でもあるが「招き」「信仰の誓い」「学び」「試みの中における助け」を主題とする。神学生や支える人々は、洗礼の誓いを想起し、また、聖職の道への学びに招かれた者の門出にあることを、聖歌を通して認識することになる。そのために歌詞の文言を一つ一つ味わうことができるように演奏者に依頼するのも肝要となろう。CP453 の場合も聖奠を中心として日々意識される主題、すなわち「信仰」「証し」「罪の赦し」「主の平和」という主題、また、全体を通して創造論を意識させる文言が散見することから、神学生が入学後学ぶことになる諸要素を一同が認識するものとなる。こちらの場合においても、やはり演奏の速度などについて演奏者と協議しておくことが望まれる。なお、式典においては以下の者が入堂に加わることとなる：

- 司式者：学校長¹⁹
- 補式者：専任教員・特任教員
- クロスベアラー：神学生
- トーチベアラー：神学生
- サーバー：神学生
- メイス：神学生

2.2.1.2. 入学礼拝の宣言

司式者による宣言によって礼拝は展開される。ここでは集った意味が具体的に示される。

¹⁸ Anglican Church of Canada, *Common Praise*. Toronto 1998.

¹⁹ 学校長が交代する年度に当たる場合は式中に新学校長任命を行い、その際には理事長である首座主教が司式を行う。この任命についても別個式文が準備される。

主なる神への讃美、在學生とともに過ごすことになる入学者の受け入れ、神学院における生活の見守りが祈られ、聖語が続く。

2.2.1.3. 聖語：エレミヤ書 3 章 15 節

あなたがたには、私の心に適う牧者を与える。知識と悟りをもってあなたがたを養うことだろう。

旧約聖書エレミヤ書の 3 章 15 節は、背信のユダの民に神への立ち返りを求める預言に属する。預言者エレミヤは、人間が回心することによって癒され救われることを告げる。また、その際に重要であるのは知識と悟りであるという。懺悔・悔い改め、また、知識と悟り、言い換えれば単純な知識習得の作業ではなく智慧を求めてゆくという神学校において重要な理念を反映する聖句の一つと考えることができる。

2.2.1.4. 特祷

聖公会神学院特祷が唱えられる。神学院のまじわり、学びの家とする学院への祝福の願い、その導き・み心にかなう研鑽・奉仕のためにこの場に連なる者すべての信仰と智慧とが日々新たにされるよう祈るものとなっている。この祈りは入学礼拝、創立記念礼拝・逝去者記念礼拝、卒業礼拝において用いられる。

2.2.2. み言葉

み言葉からの学びは、礼拝において中心的な意味を担う。聖書箇所からは旧約聖書から一つ（第一朗読）、また、詩篇が読まれ、新約聖書から二つ——使徒書（第二朗読）および福音書——が選ばれ、福音書が最後に読まれる。説教はおもにイエス・キリストの言行を伝える福音書を中心に形成される。

2.2.2.1. 第一朗読：旧約聖書 箴言 2 章 1-12 節

子よ、もし私の言葉を受け入れ、私の戒めをあなたの内に納め、知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら、さらに分別に呼びかけ、英知に向かって声を上げ、銀を求めるようにそれを尋ね、隠された宝を求めるようにそれを探すなら、その時、あなたは主を畏れることを見極め、神の知識を見いだすだろう。

箴言のこの箇所では、主に由来する知恵の意義がくり返し言及されている。人間に由来する知恵ではない神の知恵は、旧新約聖書を通して重視されているものである。聖書を読み、祈り、まじわりの中で与えられる知恵に聴く、そのはじまりとしてこの文言を選択する。

2.2.2.2. 詩篇 第 33 編

聖書を読み、祈り、まじわりの中で与えられるものとは何かの一つとして、この詩篇が挙げられる。人間の力ではなく、主のことばと主のわざの意義を知り、信仰のうちに生きるのが救いや喜びの源泉であることを、この文言によって確認される。これは、単独でも優れた神学的な思想を有すると同時に、神の知恵について言及する第一朗読と次に読まれる第二朗読とを結びつける機能も有すると言えよう。

2.2.2.3. 第二朗読：使徒書 コリントの信徒への手紙 I 1章 17-31 節

「十字架のことば」という使徒パウロの神学の重要な概念が強調される聖書箇所が、ここで朗読される。人間の恣意的な知恵ではなく神の知恵こそが重要である、パウロの主張は、十字架につけられたキリストは神の知恵の具現であり、一般的な人間の知恵では無惨な愚かなものに見える、だがそこにこそ真理があるというものである。

ところが、神は知恵ある者を恥じ入らせるために、世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、世の弱い者を選びました。また、神は世の取るに足りない者や軽んじられている者を選びました。すなわち、力ある者を無力な者にするため、無に等しい者を選びましたのです。それは、誰一人、神の前で誇ることはないようにするためです。あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのです。キリストは、私たちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです（1:27-31）。

神学に取り組むことが単なる情報の羅列的な習得ではなく、全人的なキリスト教的な取り組みおよび信仰生活を送るための知恵を求めるためのものだとすることを認識して、この聖書箇所を分かち合う。

2.2.2.4. 聖歌

聖餐式における福音書前の聖歌と同じ意味を有する²⁰。福音書で読まれる聖書箇所について想いをめぐらせるときともなる。福音書の朗読箇所がマルコによる福音書 12 章 28-34 節であるため、これを主題とする聖歌第 489 番がここで歌われる。

2.2.2.5. 福音書 マルコによる福音書 12 章 28-34 節

神への愛と隣人への愛を並行して、愛の意味、神や隣人への向かい方を示すこの教えは「最大の戒め」とも呼ばれる、聖書において重視される箇所の一つである。申命記 6 章 4-5 節とレビ記 19 章 18 節を組み合わせたイエスの言葉に答えて、律法学者は「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛

²⁰ 昇階唱も可。

する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」と述べた。これにイエスは「律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』」と応えている。

知恵と訳されている語は、新約聖書の原語ギリシャ語では σύνεσις (シュネシス) という語が用いられ「識見」といった意味での理解力を表わす。ここでも、単なる情報の羅列的な習得が目指すべき事柄ではないということは、心、魂、思い、力と並べられて人間の根底に迫るものとして挙げられていることから示唆されよう。

2.2.2.6. 説教

これらを受けて、説教者は聖書箇所とりわけ福音書の言葉を、礼拝をともにしている人々と分かち合う。説教は、朗読された聖書箇所の説明に留まらず、執り行われている礼拝の意味を伝え、また、その聖書の言葉が今、その共同体に対して何を語りかけているかを示す。そのため、入学礼拝における説教には、新入生、その新入生の支援者、在學生、来賓、教職員らがその学びを分かち合うようなものが求められる。

日本聖公会の主日礼拝は特祷、第一・第二朗読、詩編、聖歌、福音書が一体となってみ言葉の項を形成する。入学礼拝もこれに則ることになる。なお、本研究における式文では入学礼拝であることをふまえた聖書箇所が選択されているが、説教者が抱いている入学者への想いや伝えるべきと考えた経験を優先した説教になることも妨げられるものではない。

また、説教者が入学礼拝の準備段階から深くかかわり、説教で伝えるべきと判断された使信がある場合、ここまで示してきた「み言葉」の項における聖書箇所は説教者の挙げるものに変更されることもあって良いであろう。ただし、日本聖公会の神学的見解や聖公会神学院の見解などとの対話があらかじめあることが望まれる。

2.2.3. 受入

この受入の項は、み言葉と並び、入学礼拝の根幹を形成する。日本においては入学式や卒業式は、年度の境目の重要事である。他方、世界に目を向けると、入学式・卒業式というものの自体、催されているところは多くはない。ただし、その場合でも教会や神学校における新しい信徒・新しい学生の迎え入れの式文は存在する。受入の項目は、それら様々な式次第をふまえたものとなっている。

2.2.3.1. 推薦—試問

新しい学生の招きについてはまず推薦者（試験担当教員）が、その名前と所属教区・教会、推薦司祭の名前を読み上げ、学生と送り出す教区・教会の一体性を確認する。その後、校長による試問・応答が入学者一人一人と行われる。試問はアングリカン・コミュニオンの Five Marks of Mission（宣教の五指標）を基に設定された五つの問いによって形成され

る。すなわち：

- 神の治めの福音を宣べ伝えるため、聖書の学びに努めるか
- 聖なる公会の伝統に従って行う牧会の務めのため、歴史の学びに努めるか
- 愛の奉仕によってとなりびとの必要に応えるため、心を尽くせるように努めるか
- 社会の不正や暴力に反対し、平和と和解を追求するため、知恵を尽くせるように努めるか
- すべてが被造物であることを認識し自然との共生を促進するため、力を尽くせるように努めるか

これらのことへの決意を確認するものとなる。新入生はそれらに対し「神の助けによって努めます」と心をこめて応答することが求められる。

これを受けて校長は、入学の認証を行い学生に名簿への氏名記入を求める。これを終えると校長と会衆のあいだで、神学生をともに見守る応唱が行われる。続けて、校長は「神学生のための祈り」を唱え、学生の歩む先が祝福されたものとなるよう祈る。また、一同で、新しい学生が迎え入れられたことへの感謝を述べる。

この一連の流れにより、神学生の受け入れを通して神学校、教区・教会ことに入学礼拝に集った者たちが新入生を祝福し、継続的な見守りを宣言し、学生はその中で神と民とに仕える聖職への道の開始を意識する。そのような認識が各人にもたらされるよう、一つ一つの言葉がかみしめられる空気を作り出すことも求められる。

2.2.3.2. 平和の挨拶

共同体への新しいメンバー受け入れ（Welcoming New People to a Congregation）²¹のルブリックと同じように、ここで平和の挨拶がかわされる。ここでもまた、この集いの意義を、また、平和の想いを込めるためにコロサイの信徒への手紙3章15節を引照する：また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和のために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。また、感謝する人になりなさい。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和のために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。また、感謝する人になりなさい。

2.2.3.3. 代祷

平和の挨拶をかわした後、校長または主教臨席時には神学生の属する教区主教が、新入生に祈祷書を授与する。聖公会では聖職按手の際に聖書が授与されるが、神学生活の始まりに際し、本式文においては祈祷書の授与を提案する。本質的には各教会でも日々の礼拝が

²¹ The Protestant Episcopal Church in the United States of America, *The Book of Occasional Services* 2022. New York 2022: pp. 146-147.

献げられるべきではあるが、聖職の人数不足や信徒の居住地と所属教会の距離の他様々な理由で、朝夕の礼拝を含む日々の礼拝までもが守られている教会は日本聖公会では必ずしも多くはない。しかし、神学校生活においては朝の礼拝に始まり、夕の礼拝に終わるのが原則である。祈祷書が校長あるいは教区主教から授与されること――仮に数冊目になるとしても――、神学生にとって神学校における礼拝生活の開始のための象徴的なものになると思われる。

続けて、新入生が代祷を献げる。これにより、新しい神学生は、礼拝生活の第一歩を踏み出すことになる。代祷は「世界のため」「地域・社会のため」「世界の聖公会のため」「日本聖公会のまじわりのため」「神学校のため」の五つから成る。最初の二つは聖公会の創造論と宣教論にかかわるものであり、続く二つはアングリカン・コミュニオンにかかわるものである²²。最後に自分たちが所属する神学校を憶える言葉で、聖公会神学に連なる者としての意識が高められてゆくことが期待される。

これらの代祷が献げられた後、この部は主の祈りによって締めくくられる。

2.2.4. 結

2.2.4.1. 感謝

礼拝の終わりに向けて、まず、この集いが祝福の中に進められたこと、それが主なる神、イエス・キリストの愛、聖霊のまじわりにあって実現したものであることをあらためて認識し、感謝を献げる。その感謝を主への仕えとして示すことができるよう願って祈りを終える。

2.2.4.2. 紹介

ここで校長があらためて新入生の紹介をし、その後、在学生、職員、教員の順に紹介を進める。これにより、新入生を迎えた神学院の新体制を参集した人々に示すことになる。

2.2.4.3. 派遣

集められた者は、司祭（主教臨席のときは主教）の祝福をあらためて受ける。その祝福は主イエスの愛によって引き寄せられた皆が、主に仕える中で強められ、主イエスに由来する喜びによって心が満たされることを願う祝福となっている。これにより、一同は再び神と民とに仕える主の祭司として遣わされてゆく。聖歌 550 番を以て退堂する。「主の言葉に堅く立つ」という言葉ではじまる、信仰告白を基本的な主題とするこの聖歌は、単なる知識習得のためではない今後の神学生生活への想いを共有する響きを有しよう。

²² 日本聖公会では代祷表が管区から毎年配布されており、日々の礼拝でことに憶えて祈る教区・教会の名前が挙げられており、世界の聖公会に連なる教会のためと日本聖公会に連なる教会のためとに区分されている。

2.3. 卒業礼拝の構造——主題：神がともにいてくださる中での宣教派遣

卒業礼拝は以下のような構造を有する：

序

- 1) 参集
- 2) 卒業礼拝の宣言
- 3) 聖語
- 4) 特祷

み言葉

- 5) 第一朗読：旧約聖書
- 6) 詩篇
- 7) 第二朗読：使徒書
- 8) 聖歌
- 9) 福音書
- 10) 説教

卒業

- 11) 推薦一試問
 - 12) 平和の挨拶
 - 13) 代祷
- 結
- 14) 感謝
 - 15) 紹介
 - 16) 派遣

聖公会神学院においては、卒業礼拝でも聖餐式の形式を採らないため、「み言葉」と「聖餐」ではなく、「み言葉」と「卒業」が構造の中心を形成することとなる。以下、各項目について説明を加えることとする。

2.3.1. 序

2.3.1.1. 参集

卒業式という文脈を以て集う式典であることを意識しつつ、聖歌 550 番を用いて入堂する。入学礼拝の最後で歌われたものであり、所定の学びの期間を経た神学生や入学礼拝の参加者各位に対して神学院における最初の日の礼拝へ想いをともに回帰する意味も込める。主題的にも、ことに 2 番に見られる「われは民と共にある」という詞は、文脈こそ異なるものの、卒業礼拝における「神がともにいてくださる中での宣教」という主題とも共鳴す

ると思われる。演奏の速度などについてはここでも、演奏者と協議しておくことが望まれる。なお、式典においては以下の者が入堂に加わることとなる：

- 司式者：学校長²³
- 補式者：専任教員・特任教員
- クロスベアラー：神学生
- トーチベアラー：神学生
- サーバー：神学生
- メイス：神学生

2.3.1.2. 卒業礼拝の宣言

司式者による宣言によって礼拝が展開される。ここでは集った意味が具体的に示される。主なる神への讃美、新しい旅立ちを迎えた卒業生への今後の生活の見守りが祈られ、聖語が続く。

2.3.1.3. 聖語：シラ書 34 章 12 節

わたしは国を離れて旅をし、多くのことを見た。わたしが悟ったことは、語り尽くすことができない。

シラ書のこの文言は、神学生としての生活の実際を的確に表現する言葉となることが予測される。入学礼拝の際に読まれたエレミヤ書 3 章 15 節の「知識と悟り」とも共鳴する。参集している者が皆、卒業生のこれまでの学びについて想いをともにし、一つの旅の終わりを見ることになる。

2.3.1.4. 特祷

聖公会神学院特祷が唱えられる。神学院のまじわり、学びの家とする学院への祝福の願い、その導き・み心にかなう研鑽・奉仕のためにこの場に連なる者すべての信仰と智慧とが日々新たにされるよう祈るものとなっている。この祈りは入学礼拝、創立記念礼拝・逝去者記念礼拝、卒業礼拝において共通して用いられる。

2.3.2. み言葉

み言葉からの学びは、礼拝において中心的な意味を担う。聖書箇所からは旧約聖書から一つ（第一朗読）、また、詩篇が読まれ、新約聖書から二つ——使徒書（第二朗読）および福音書——が選ばれ、福音書が最後に読まれる。説教はおもにイエス・キリストの言行を伝える福音書を中心に形成される。

²³ 学校長が退任する年度に当たる場合は式中に学校長退任の式も行い、その際には理事長である首座主教が司式を行う。この任命についても別個式文が準備される。

2.3.2.1. 第一朗読：旧約聖書 エレミヤ書 31章 31-34節

その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家、およびユダの家と新しい契約を結ぶ。エレミヤ書 31章 31節は旧約聖書の中で唯一「新しい契約」という言葉が見られる箇所である。その意図するところは、イスラエルの民がソロモンによって建てられたエルサレム神殿（第一神殿）を失い、バビロンへと捕囚される歴史にあって、出エジプトの際にモーセを通して与えられた契約いわゆるシナイ契約が更新される、というものである。新しい契約は「私は、私の律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心に書き記す」ものであるという。これは後に新約聖書の中で「新しい契約」（ルカによる福音書 22章 20節、コリントの信徒への手紙 I 11章 25節、ヘブライ人への手紙 9章 15節など参照）という言葉が出現する備えとなっている。この箇所を読むことで、キリスト教にとってのイエス・キリストの登場について参集者一同が想いをめぐらせることが期待される。また、「私は彼らの神となり、彼らは私の民となる」という文言は、再び生活の主たる舞台となってゆく「神の民の共同体」としての教会へ想いをめぐらせる契機ともなる。

2.3.2.2. 詩篇 第33編

入学礼拝と同様の箇所を選択した。人間の力ではなく、主のことばと主のわざの意義を知り、信仰のうちに生きるのが救いや喜びの源泉であることを記すこの詩篇は卒業礼拝でも読まれ、入学礼拝の際に神の智慧について考えをめぐらせたことを想起したい。また、「神の民」としてのモチーフも見られるため、これからあらためて世界へ遣わされてゆくことになる神学生に対して、今一度読まれたい箇所であると言える。

2.3.2.3. 第二朗読：使徒書 コリントの信徒への手紙 II 13章 5-13節

ここで、新しい契約すなわち新約聖書を有するキリスト教が最重要な主題の一つとする三位一体についての想いの共有が展開されてゆく。ことに、この文書の最後で使徒パウロが述べている「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にありますように」という祝祷は、神学院における日々の礼拝で何度も最後に唱えるものであり、神学生にとって卒業礼拝時には染みこんだ文言になっているとも思われる²⁴。この慣れ親しんだ文言を中心に、教会共同体に対してパウロが「初心に帰るように」祈ったことなども加えて、あらためて学びの全体に想いをめぐらせることが期待される。

2.3.2.4. 聖歌

聖餐式における福音書前の聖歌と同じ意味を有する²⁵。福音書で読まれる聖書箇所につ

²⁴ ただし、祈禱書においては「あなたがた一同と共に」は「わたしたちとともに」に言い換えられる。

²⁵ 昇階唱も可。

いて想いをめぐらせるときともなる。福音書の朗読箇所がマタイによる福音書 28 章 16-20 節であるため、これを主題とする聖歌第 406 番がここで歌われる。この聖歌はそれに加えて、洗礼や聖霊についても想いをめぐらせるものであり、卒業に際して初心に帰る意味も付随する。

2.3.2.5. 福音書 マタイによる福音書 28 章 16-20 節

マタイによる福音書の最後は、宣教論的に不可欠な要素が詰め込まれている：

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた、「私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。

「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」という言葉は、新約聖書で唯一、三位一体にかかわる語が単純並列（「～と～と～」）で示される箇所である（上記コリントの信徒への手紙Ⅱ 13 章 13 節も並列しているが、それぞれに「恵み」「愛」「まじわり」という名詞をそれぞれ伴っている）。また、宣教とは何かということも端的に示されている。

神学生は卒業礼拝を経て、実際に遣わされてゆく。この聖書箇所から得られる使信が重要であることは言うまでもないであろう。

2.3.2.6. 説教

上記の流れを受けて、説教者は聖書箇所とりわけ福音書の言葉を、礼拝をともにしている人々と分かち合う。説教は、朗読された聖書箇所の説明に留まらず、執り行われている礼拝の意味を伝え、また、その聖書の言葉が今、その共同体に対して何を語りかけているかを示す。卒業礼拝における説教には、卒業生、その卒業生の支援者、在學生、来賓、教職員らとその学びを分かち合うようなものが求められる。とりわけ、卒業して世界に遣わされてゆく神学生に対し、説教者が宣教への旅路を後押しすることは神学生にとって忘れることのできない体験になるであろう。

日本聖公会の主日礼拝は特禱、第一・第二朗読、詩編、聖歌、福音書が一体となってみ言葉の項を形成する。入学礼拝の際と同様、卒業礼拝もこれに則ることになる。なお、本研究における式文では卒業礼拝であること、また、入学礼拝と卒業礼拝とが聖公会神学で重要な事柄とリンクするように聖書箇所をふまえての朗読箇所選択が行われているが、説教者が抱えている卒業生への想いや伝えるべきと考えた経験を優先した説教になることは

もちろん妨げられるものではない。

また、説教者が卒業礼拝の準備段階から深くかかわり、説教で伝えるべきと判断された使信がある場合、ここまで示してきた「み言葉」の項における聖書箇所は説教者の挙げるものに変更されることもあって良いであろう。ただし、日本聖公会の神学的見解や聖公会神学院の見解などとの対話があらかじめあることが望まれる。

2.3.3. 卒業

この卒業の部は、み言葉と並び、卒業礼拝の根幹を形成する。日本においては入学式や卒業式は、年度の境目の重要事である。他方、世界に目を向けると、入学式・卒業式というもの自体、催されているところは多くはない。ただし、その場合でも教会や神学校における信徒や学生の旅立ちの式文は存在する。この項目は、それら様々な式次第をふまえたものとなっている。

2.3.3.1. 試問

卒業生について、まず推薦者（卒業試験担当教員）が、その名前と所属教区・教会、推薦司祭の名前を読み上げ、学生と送り出す教区・教会の一体性を確認する。続けて、卒業に必要な全科目と卒業論文（聖公会神学院では「宣教とミニストリー論文」と呼ぶ）を終えたことを宣言し、最終試問に推薦する。

その後、校長によって試問・応答が入学者一人一人と行われる。入学礼拝の際と同様、試問はアングリカン・コミュニオンの **Five Marks of Mission**（宣教の五指標）を基に設定された五つの問いによって形成される。すなわち：

- 聖書から学んだことを通して、神の治めの福音を宣べ伝えてゆくか
- 聖公会の歴史・伝統から学んだことを通して、新たな牧会に臨んでゆくか
- 愛の奉仕によってとなりびとの必要に応えるため、心を尽くすか
- 社会の不正や暴力に反対し、平和と和解を追求するため、智慧を尽くすか
- すべてが被造物であることを認識し自然との共生を促進するため、力を尽くすか

入学礼拝において神学校生活の中で努めるか問われたことを想い起し、学びを生かしてこれらのことにひき続き臨んでゆく決意をあらためて確認するときとなる。卒業生はこれらに対し「神の助けによって努めます」と心をこめて応答することが求められる。

これを受けて校長は、卒業の認証を行い学生に名簿への氏名記入を求める。これを終えると校長と会衆のあいだで、神学生とともにひき続き見守ることを告げる応唱が行われる。続けて、校長は「神学生のための祈り」を唱え、学生の歩む先が祝福されたものとなるよう祈る。また、一同で、卒業生がこのときを迎えたことへの感謝を述べる。

この一連の流れにより、神学生が今後神学校から教区・教会へと帰ってゆき、新たな務

めに着くということへの想いが皆に共有される。また、継続的な見守りが宣言され、卒業生は其中で神と民とに仕える聖職への道をあらためて強く意識する。そのような認識が各人にもたらされるよう、一つ一つの言葉がかみしめられる空気を作り出すことも求められる。

2.3.3.2. 平和の挨拶

ここでもまた、この集いの意義を、また、平和への想いを込め、使徒書でも読まれたコリントの信徒への手紙Ⅱ 13章 11節を再び引照する：きょうだいたち、喜びなさい。初心に帰りなさい。励まし合いなさい。思いを一つにし、平和に過ごしなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。

2.3.3.3. 代祷

平和の挨拶をかわした後、卒業生が代祷を献げる。代祷は入学礼拝の際と同じく、「世界のため」「地域・社会のため」「世界の聖公会のため」「日本聖公会のまじわりのため」「神学校のため」の五つから成る。最初の二つは聖公会の創造論と宣教論にかかわるものであり、続く二つはアングリカン・コミュニオンにかかわるものである。最後に自分たちが所属する神学校を憶える言葉で、聖公会神学に連なる者としての意識が高められてゆくことが期待される。基本的には、この代祷は入学礼拝と卒業礼拝の際にのみ用いられる。ここでも入学礼拝と卒業礼拝の枠構造を形成する。

これらの代祷が献げられた後、主の祈りによってこの部は締めくくられる。

2.3.4. 結

2.3.4.1. 感謝

礼拝の終わりに向けて、まず、この集いが祝福の中に進められたこと、それが主なる神、イエス・キリストの愛、聖霊のまじわりにあって実現したものであることをあらためて認識し、感謝を献げる。その感謝が主への仕えとして示すことができるよう願う。

最初の感謝の祈りは入学礼拝と同様であるが、卒業礼拝では続けて旅立つ神学生の歩みへの祝福とひき続きのまじわりとが、神と聖霊とともに一体であり、世々に生き支配しておられるみ子イエス・キリストによって願われる。卒業を以て神学生と神学校の関係が断絶するわけではない。両者の関係性もまた新たにされながら続いてゆくようにとの願いがここであらためて明確化する。

2.3.4.2. 紹介

ここで校長が卒業生を紹介し、その後、在學生、職員、教員の順に紹介が進められる。これにより、卒業式を迎えるに至った神学院のまじわりの構成を参集した人々に示すこと

になる。

続けて、卒業生の宣教とミニストリー論文の主査を行った教員が、それぞれ神学生に対して記念としての一冊の書物を贈る。書物の分野や内容は教員が論文指導を担当した学生の関心や思考、趣味などを総合的に判断して決定される。教員からの短い祈りを経て、礼拝は終わりを迎える。

2.3.4.3. 派遣

集められた者は、司祭（主教臨席のときは主教）の祝福をあらためて受ける。その祝福は主イエスの愛によって引き寄せられた皆が、主に仕える中で強められ、主イエスに由来する喜びによって心が満たされることを願う祝福となっている。これにより、一同は再び神と民とに仕える主の祭司として遣わされてゆく。退堂は聖歌 476 番を以て行われる。暗闇行くときにも困難の中にあるときにも、光である主イエスに導かれていることを確認し、その中で遣わされていることを主題とするこの聖歌は、神学生を祝福の中で送り出すにふさわしいものの一つであると思われる。

3. おわりに

以上、入学式・卒業式の式文を読み、建学の精神をどのように反映するか考察し、その過程で得られた知見を実際に聖公会神学院の入学礼拝・卒業礼拝に投影する作業を行った。本学の場合は、神学校であるため、聖公会神学に即した内容としたが、日本のキリスト教主義学校は、多くの場合、ノンクリスチャンによる礼拝となる。そのため、神学的な基盤を重視しつつも、本稿で論じた術語などについてはより平易な表現で展開する必要もあると思われる。しかし、いずれにせよ、学生を迎え入れ、そして送り出す際に自身の教育機関が何を大切にしてきた・しているのかを明示することは、そこに関わるすべての者にとって、教育意識の向上に資すると思われる。入学礼拝と卒業礼拝という枠組みが明確につながることで、その中の日常の教育にも建学の精神を生かす意識が各人に浸透することもできよう。実際のところ、筆者自身、入学礼拝と卒業礼拝についての本研究を通して、本学における神学教育の精神をあらためて熟考する機会が与えられた。

現時点では具体的な予定はまだないが、本研究の作業結果を活かして今後、建学の精神をより良く反映する学校教育がどのようにすれば実現しうるかといった議論も展開してゆきたいと考えている。

参考文献

基本資料

- ・ 日本聖公会『日本聖公会祈祷書』日本聖公会管区事務所 1990年（2018年改訂第3版）
- ・ 日本聖公会『日本聖公会聖歌集』日本聖公会管区事務所 2006年（2008年第2版）
- ・ Anglican Church of Canada, *Common Praise*. Toronto 1998.
- ・ Church of England, *New Patterns for Worship*. London 42022.
- ・ Evangelische Landeskirche in Württemberg, *Evangelisches Gesangbuch*. Stuttgart 1996.
- ・ The Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the United States of America, *The Book of Occasional Services 2022*. New York 2022: pp. 146-147.
- ・ 文部科学省「学校基本調査」(URL : https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm) : 2023年12月31日閲覧

参考資料

- ・ 石川大二郎／山中新太郎「キリスト教主義学校における学校礼拝に関する研究～礼拝空間を中心とした校舎形態の分析～」日本大学理工学部（編）『平成27年度 日本大学理工学部学術講演会予稿集』 2015年：543-544頁所収
- ・ 市原信太郎「キリスト教主義学校における礼拝の意味『キリスト教主義の学校』を教会たらしめる営み」名古屋柳城短期大学（編）『研究紀要』（第27号） 2005年：145-152頁
- ・ 尾高朝雄『法の窮極に在るもの』有斐閣 1947年
- ・ 齋藤崇徳「日本における宗教系大学の比較分析——制度的変数を中心として——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53号 2013年：55-66頁
- ・ 佐藤節子「法の拘束力に関する一考察」日本法哲学会（編）『法哲学年報 1977』1978年：17-51頁
- ・ 西原廉太「聖公会の神学から考えるミッションと伝統の現代化」日本聖公会管区『第62回 聖公会関係学校教職員研修会報告書』 2019年：4-21頁
- ・ 樋口進「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」関西学院大学キリスト教と文化研究センター（編）『関西学院大学キリスト教と文化研究』（第15号） 2013年：107-109頁
- ・ アリスター E.マクグラス『アリスター・E・マクグラス宗教教育を語る——イギリスの神学校はいま』（高橋義文訳）キリスト新聞社 2010年